

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

—データベース化事業を通して—

三 沢 伸 生
大 澤 広 嗣

1. はじめに

戦前・戦中期の日本におけるイスラーム関係諸史資料は、いわゆる「回教」政策にかかわるものとして、戦後に占領軍による押収にあたり、消失・散逸・埋没してしまった。現在においてこうした諸史資料の探索・分析そしてデータベース化による保存・共有が緊急課題となっている。

ようやく20世紀期末になって、日本とイスラーム世界との関係を歴史的に見直す機運が高まり、例えば大久保幸次が主宰した回教圏研究所の機関誌である『回教圏』全号が発掘・復刻出版されたのを嚆矢として、単行本・逐次刊行物の公刊物ばかりでなく、公文書・私文書なども含めた諸史資料の探索・分析が進められるようになってきている⁽¹⁾。

こうした諸史資料がデータベースとして整備されることによって、現今の学界において注目を集める「回教」政策、言わば思想・政治の諸問題ばかりか、日本社会の中におけるイスラーム教徒の諸状況にかかわる史資料を見出すことが可能になる⁽²⁾。すなわち、諸史資料のデータベースの蓄積・整備によって、例えば本プロジェクトが目指す、近代日本の民族スポーツ形成に寄与したタタール系トルコ人たちについても様々な情報を得ることができるのである。

本稿では、上記の視点にたち、本プロジェクトの推進のためにとどまらず、巨視的に日本とイスラーム世界との関係を研究するために、従来の研究では看過されてきた、日本における数

少ない仏教系日刊新聞である『中外日報』に関して、1937年から1945年までの期間におけるイスラーム関係記事のデータベース化を試みるものである。

2. 『中外日報』

本稿が扱う『中外日報』は浄土真宗本願寺派の寺院に生まれた真溪涙骨（本名：正遵、1869～1956年）によって刊行された仏教系日刊新聞である。

1885年に本願寺の普通教校（現在、龍谷大学）に入学した真溪は、翌年に退学して各地で修業しながら文筆の研鑽を進め、1897年に京都において仏教界の革新を目指して旬刊新聞として『教学報知』を創刊した。同紙は評判を呼び、やがて日刊新聞となり、1902年1月15日に、『中外日報』と改題した。

同紙は戦中期において新聞用紙統制を受けて頁数を減らしたり、戦後に日刊から週3日刊行に移行するなど、様々な紆余曲折を経ながら現在も刊行が続いている。

仏教系日刊新聞である本紙は、仏教関係に限定することなく、神道・キリスト教・イスラームなど諸宗教を取り扱っている。その背景には日本の仏教界は明治期より広く諸宗教に関心を抱き、その動向・情報を探っていた歴史がある。公的記録から確認できる日本人によるイスラーム世界への接触の嚆矢が、在欧中の岩倉使節団から1872年にオスマン帝国の首都イスタンブルに派遣された福地源一郎（1841～1906年）と、それに同行した浄土真宗本願寺派僧侶の島地黙

雷（1838～1911年）であることは日本の仏教界の姿勢をよく示す⁽³⁾。

また仏教界は思想・イデオロギーに関しても敏感であり、本紙はそのための史料としての重要性を有する。例えば日本におけるマルクス主義の受容とその社会背景を探るための研究としても本紙は分析されている（林 2007, 新野 2009）。

3. 対象年代（1937～1945年）

創刊以来、イスラームに関して扱ってきた本紙であるが、その数が増加するのは日本社会においてイスラームの関心が高まる1938年前後である。

広く知られているように、1938年は3月に東京白金において大久保幸次が中心となり、回教圏研究所（のち1940年に回教圏研究所に改称）が開設され、5月に東京代々木に東京モスク（東京回教堂）が開堂した。その背景には、政財界・軍部・アジア主義者らによる、いわゆる「回教」政策の推進がある。

このことから、今回はその前年である1937年から日本が敗戦した1945年までを対象として、本紙の中からイスラーム関係記事を抽出した。

対象年代において、イスラーム関係記事と分類できるものは、下の表のように総計で372件に及び、その数が一般大手日刊新聞に比べて多いこと分かる⁽⁵⁾。

年（西暦）	記事数
1937年	61
1938年	62
1939年	69
1940年	16
1941年	31
1942年	68
1943年	26
1944年	38
1945年	1
総計	372

その詳細は付した一覧のように、内容・関係者は多岐にわたり、また戦争突入後は、北進論・南進論に呼応するかのように対象地域の変化に呼応した記事が現れるなど、当時の「回教」政策、日本とイスラーム世界の関係を知るうえで際めて重要な史料となるものである。

4. おわりに

本稿で試みたように、『中外日報』は日本で数少ない仏教系日刊新聞として、宗教的見地から大手の日刊新聞以上に、調査対象時期である戦前・戦中期において、イスラームに関心を抱いていたことが分かった。それでも本紙に含まれるイスラーム関係記事には、当時、東京や関西圏において多数居住していた在日タール系トルコ人にかんする情報はほとんど含まれていないことが確認された。もちろん記事がないことは彼らの存在・活動が小さかったことを意味するのではなく、日本の関心が低かったことを示すものである。日本社会が彼らの存在を認知し、彼らが格闘技を中心に日本の民族スポーツに寄与するには、「回教」政策が払拭され自由な存在として日本社会で活躍できる場として、戦後を待たなくてはならなかったのである。

本稿で試みたデータベースにかんしては、内容的に期間を1937年以前に遡って充実化を図るとともに、機能として将来的に英文表記併記や本研究所のホームページ掲載などネット上への移行を進め、データベースとしての汎用性を高めていくことを目指していきたい。

※本稿は、東洋大学学術推進センター・研究所プロジェクト研究助成金に基づく、研究課題「近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割」【拠点：東洋大学アジア文化研究所、研究代表者：石井隆憲、平成23～25年度】の研究成果の一部である。

* 三沢伸生（東洋大学社会学部教授）

* 大澤広嗣（文化庁文化部宗務課専門職）

<参考文献>

- * 大澤広嗣 2002. 「大久保幸次をめぐるイスラーム研究史考」『駒澤大学大学院仏教学研究會年報』35, 81-93頁.
- * ——2004. 「昭和前期におけるイスラーム研究：回教圏研究所と大久保幸次」『宗教研究』78-2, 493-516頁.
- * 川村光郎 1987. 「戦前日本のイスラーム・中東研究小史：昭和10年代を中心に」『日本中東学会年報』2, 409-439頁.
- * 新野和暢 2009. 「仏教者の社会運動論：三浦玄洞のマルクス主義理解と社会的実践」『法政大学大学院紀要』63, 262-253頁.
- * 杉田英明 1995. 『日本人の中東発見』東京大学出版会.
- * 東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター 2008. 『亜細亜義会機関誌『大東』（CD-ROM版, Ver.1）』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター.
- * ——2009. 『東洋倶楽部『東洋』（CD-ROM版, Ver.1）』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター.
- * 林淳 2007. 「座談会・仏教とマルクス主義—一九三〇年の『中外日報』」『東京大学宗教学年報』25, 145-183頁.
- * 三沢伸生 2008. 『日土貿易協会『コンスタンチノーブル日本商品館館報／イスタンブル日本商品館館報』（DVD版, Ver.1）』東洋大学アジア文化研究所.
- * ——2009. 『日土協会『日土協會會報』（CD-ROM版, Ver.1）』東洋大学アジア文化研究所.
- * MISAWA, Nobuo 2012. *Tatar Exiles and Japan: Kōji ŌKUBO as the Mediator*, Tokyo: Asian Cultures Research Institute, TOYO University.
- * 三沢伸生・大澤広嗣 2012. 「在日タタール人と日本の学会との接点：大久保幸次の著作分析」『アジア文化研究所研究年報』（東洋大学アジア文化研究所）46, 327-354頁.
- * MISAWA, Nobuo & OSAWA, Koji 2013. "Japanese recognitions about Islam before and

during World War II: Articles related to Islam in CHUGAI NIPPŌ, Buddhist Daily Newspaper (1937-45), *Annals of Japan Association for Middle East Studies* (= 『日本中東学会年報』), 28-2 (脱稿済, 掲載決定).

<註>

- (1) 『月刊回教圏』（復刻版, 全10巻）, ビブリオ, 1986年（元版は, 第1巻1号から第8巻9号, 1938年から1944年まで）。また最近では, 戦前・戦中期における日本のイスラーム研究の指導的立場にあった大川周明の率いる南満州鉄道株式会社東亜経済調査局が発刊していた『新亜細亜』が復刻出版されはじめた（『新亜細亜』（復刻版, 全19巻+別巻1）不二出版, 2011～13年予定）。一方, 本研究所でも, 『大東』, 『東洋』, 『コンスタンチノーブル日本商品館館報／イスタンブル日本商品館館報』, 『日土協會會報』といった逐次刊行物を史料CD-ROM, DVDブックの形態で刊行してきた（東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター 2008, 2009, 三沢 2008, 2009）。
- (2) わが国における, 史資料のデータベース化事業としては, たとえば2003年来の東京外国語大学地球社会先端教育研究センターの史資料ハブ地域文化研究拠点 (URL <http://www.tufs.ac.jp/21coe/area/index-j.html>), 2001年に国立公文書館の組織として設立されたアジア歴史資料センター (URL <http://www.jacar.go.jp/>) の活動が代表的なものとして筆頭にあげられる。
- (3) 杉田1995, 114頁。
- (4) 大久保幸次が果たした役割については, 川村1987, 大澤2002, 2004, 三沢・大澤2012, Misawa 2012を参照のこと。
- (5) まだ一般大手日刊新聞との正確な比較が完了していないが, 例えば創刊以来の全記事を「ヨミダス歴史館」というオンライン・データベース化している読売新聞を, 同対象年代でもってキーワード検索しても, イスラーム関係記事の件数は本紙よりもかなり少ない。

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

凡例

- ・本目録は、仏教系新聞の『中外日報』（中外日報社発行）に掲載された、回教関係記事の書誌情報を収録したものである。ただし未定稿である。対象期間は、日中戦争が勃発した1937（昭和12）年から敗戦の1945（昭和20）年まで。総記事数は372件。
- ・『中外日報』からの記事目録の作成、ならびに内容見本として掲載した記事は、全て同紙のマイクロフィルムに依拠した。マイクロフィルムは、製作は中外事業株式会社、撮影は光楽堂、販売は中外日報社。京都大学図書館の所蔵本を撮影したものである。参照したリールは、次の通りである。

第22巻	1936年11月17日～1938年2月26日	第11172～11554号
第23巻	1938年2月27日～1939年11月12日	第11555～12070号
第24巻	1939年11月13日～1941年8月5日	第12071～12586号
第25巻	1941年8月6日～1943年11月30日 ※1943年12月1日～1944年1月末までは欠号	第12587～13281号
第26巻	1944年2月1日～1945年12月29日 ※1944年4月1日～1944年4月末日、7月1日～7月末日、10月1日～11月末日までは欠号	第13331～13807号

- ・本目録は、短期間で作成したため、記事の所収に際して遺漏があると思われる。記事の見出しから判断して採録したため、見出しに「回教」等の語句がなくとも、記事の本文中で回教について言及した記事がさらに存在することが予測される。目録の完全版の作成は、今後の課題とする。

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二八六

著者名	肩書	記事見出し	号数	発行年月日	頁	備考
		「新興国トルコを中心に／欧州最近の宗教情勢／大久保幸次氏婦朝談」	11209	19370106	3	
		「回教徒と連携して牧羊場を経営／多角農業のサンプル示す／大派満洲間島布教所」	11213	19370110	3	「大派」は、真宗大谷派のこと。
		「新生の日本回教文化協会／堂々の陣容確立す／注目すべき事業内容」	11218	19370116	3	日本回教文化協会の創立世話人は、今岡十一郎、笠間景雄、松本徳明、内藤智秀、渡辺鏡蔵。
アブデュル・カディール・ニヤーズ		「イスラームに於けるアフマディヤ運動」	11226	19370126	1	
		「筆者ニヤーズ氏を紹介することば」	11226	19370126	1	
		「回教の類似二団体に合同問題起る／今後の工作に期待」	11227	19370127	4	日本回教文化協会（今岡十一郎ら）と回教文化協会（佐久間貞次郎）の合同。
		「清真寺協和会を組織／満洲国回教徒」	11236	19370206	3	
A・Q・ニヤーズ		「イスラームの観たる十字架：上」	11242	19370214	1	日本在住の回教徒アブデュル・カディール・ニヤーズ。
		「必須科目として回教講座を開設／日本大学宗教科」	11242	19370214	4	演習「回教講座」を開設予定だが、講師は人選中。
A・Q・ニヤーズ		「イスラームの観たる十字架：中」	11243	19370216	1	
A・Q・ニヤーズ		「イスラームの観たる十字架：下」	11244	19370217	1	
		「類似両団体の諒解成り愈よ合併・新団体を結成／廿日、盛大な創立総会と発会式／我が国回教文化研究に光明」	11245	19370218	4	日本回教文化協会のこと。
		「蒙古の文化開発に／同地の回教を研究／善隣協会が具体案考究」	11259	19370306	4	研究に着手した事実のみで、本文中に組織名はなし。
徳川家正	駐土特命全権大使	「政治上より見たるトルコの回教」	11263	19370311	4	
		「毎日、天御中主神に五度礼拝を捧ぐ／大日本イスラーム教運動／有賀文八郎氏の献身的伝道／林首相も賛成支持／トルコにまで行き研究」	11285	19370407	4	
		「イスラーム教の日本聖典／香蘭經の翻訳成る／有賀文八郎翁の苦心」	11297	19370421	4	
		「満洲イスラーム総会」	11298	19370422	3	
		「苦心の翻訳完成／香蘭經の出版に有賀文八郎翁帰東」	11310	19370507	2	
		「ムハメッド降誕会／神戸のモスリム・モスクで」	11326	19370526	6	
		「民族解放を自覚し／回教国相互間に同盟締結／今年のメッカ大祭賑ふ」	11335	19370605	3	6月2日、大阪で開催された東方文化連盟主催による細川将・榎本桃太郎から回教事情を聴く会。両者は同年2月にメッカを巡礼。
		「回教民族から先輩と仰がれる日本はもつと彼等を研究せよ／日本回教徒の内部軋轢は残念だ」	11342	19370630	6	戸田芳助（東方文化連盟）の談話。
		「友邦皇軍の神聖／威力を信頼せよ／満洲イスラーム協会が論告」	11398	19370818	2	
ボース(天来)	印度志士	「新興イランの建設者リザ・シア：1」	11406	19370827	1	レザー・シャー・パフラヴィーのこと。
ボース(天来)	印度志士	「新興イランの建設者リザ・シア：2」	11407	19370828	1	
ボース(天来)	印度志士	「新興イランの建設者リザ・シア：3」	11408	19370829	1	

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

		「在満回教徒／皇軍に感謝」	11418	19370910	2	満洲イスラム協会奉天分会の動向。
沛亭生		「オマール雑録 1：映画「カラナグ」 其他」	11420	19370912	5	「沛亭」は筆名、本名不明。
		「共産党排撃で回教徒起つ？」	11420	19370912	3	新疆省の動向。
		「回教独立国土建設野望／支那事変を契機とするか／満回五馬連盟の待機」	11420	19370912	7	
		「在日回教徒／皇軍へ献金」	11423	19370916	3	文中に「日本在住回教徒連盟会長であるクルバンガリー氏は会員二百名に檄して募集した二百十円也」を献金とある。
沛亭生		「オマール雑録 2：回教徒と芸術」	11426	19370919	5	「沛亭」は筆名、本名不明。
沛亭生		「オマール雑録 3：コーランと剣」	11431	19370926	5	「沛亭」は筆名、本名不明。
沛亭生		「オマール雑録 4：回教と印度」	11435	19371001	5	「沛亭」は筆名、本名不明。文中に「僕は回教徒である関係から印度人に友人が多い」。
沛亭生		「オマール雑録 5：回教と印度（続）」	11443	19371010	5	「沛亭」は筆名、本名不明。
沛亭生		「オマール雑録 6：[回教と印度]」	11449	19371017	5	「沛亭」は筆名、本名不明。
		「日本の諸事業紹介に／アラビア語の雑誌発行／対外事業の第一着手」	11450	19371019	4	イスラム文化協会の事業。
		「日本回教文化協会／改名・陣容建直し／なほ実力に疑問符／今後の動きを注視」	11450	19371019	4	佐久間貞次郎は日本回教文化協会の理事を辞任。イスラム文化協会に改名へ。
沛亭生		「オマール雑録 7：婆羅門の話」	11455	19371024	5	「沛亭」は筆名、本名不明。
		「大陸文化工作座談会／仏教記者連盟」	11457	19371027	3	ラス・ビハリ・ボース、ム・ガ・クルバンガリー、下中弥三郎らの出席で座談会開催予定を告知する記事。
		「けふ亜細亜民族解放へ／頭山翁初め各民族代表集り／青年亜細亜連盟結成」	11458	19371028	3	議長ラス・ビハリ・ボース、副議長ム・ガ・クルバンガリー。
		「カ教徒の日本支持に呼応／回教徒も蹶起せん／東京回教団既に我が立場を支那回教徒に開明」	11459	19371029	2	「カ教徒」はカトリック信徒のこと。
		「亜細亜の解放叫ぶ／宣言、決議を英大使に手交／青年亜細亜会議」	11460	19371030	2	続報。
		「日本を中心にアジア民族団結の雄叫び／亜細亜民族青年代表大会」	11463	19371103	3	10月31日に東京の日比谷公会堂で開会した社団法人青年教団主催の第三回全アジア民族青年代表大会。ム・ガ・クルバンガリーら参加。
		「北支を中心に／アジアの文化工作検討／東京仏教記者連盟／大陸文化工作座談会」	11464	19371105	4	11月1日、日比谷公園松本楼で開催。ボース、クルバンガリー、下中弥三郎らが出席。
沛亭生		「オマール雑録 8：婆羅門の話（続）」	11466	19371107	8	「沛亭」は筆名、本名不明。
		「パレスティン問題で排英運動に立つ／京阪神在住回教徒」	11468	19371110	2	
金孝敬	大正大学宗 教学研究室	「支那とモハメット教：上」	11470	19371112	1	
金孝敬	大正大学宗 教学研究室	「支那とモハメット教：中」	11471	19371113	1	
金孝敬	大正大学宗 教学研究室	「支那とモハメット教：下」	11472	19371114	1	

二八五

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二八四

		「大阪にあがる亜細亜民族の叫び／各国代表参加して／あす、中央公会堂で」	11475	19371118	2	11月19日、大阪市中央公会堂で亜細亜民族大会(主催青年亜細亜連盟、大亜細亜協会、大日本生産党)。日本代表は千家尊建・中谷武世・下中弥三郎・吉田益三・由上治三郎・鈴木善一、アラビア代表は「サリウム氏」、インドネシア代表は「スデビヨ氏」ほか出席。
浦亭生		「オマール雑録 9：メッカ巡礼」	11478	19371121	3	「浦亭」は筆名、本名不明。有賀文八郎を批判する内容。
		「反英的雰囲気の中に亜細亜民族各代表吼ゆ／宣言、決議を各大臣並に英大使に手交を可決す」	11478	19371121	2	亜細亜民族大会参加した「印度ネシア代表スデビヨ氏」、トルコタタル代表カリウム、回教民族代表シヤムブンジ」ほかの動向。
		「蒙疆回教徒が防共運動に起つ／同地方回教徒大会開催」	11481	19371126	3	
		「赤化路線断絶を叫んで／蒙疆回教徒大会開催／代表者五千名が集結して」	11485	19371201	3	
ボース、ラスビハリ	印度革命志士	「パレスタインに於る英帝国主義：上」	11495	19371212	1	
浦亭生		「オマール雑録 10：婆羅門後日物語(上)」	11495	19371212	5	「浦亭」は筆名、本名不明。
ボース、ラスビハリ	印度革命志士	「パレスタインに於る英帝国主義：下」	11496	19371214	1	
浦亭生		「オマール雑録 11：婆羅門後日物語(下)」	11501	19371219	5	「浦亭」は筆名、本名不明。
須田正継		「亜細亜と回教徒／シヨウ翁の回教観その他：上」	11506	19371225	1	英国人のバーナード・シヨウのこと。
須田正継		「亜細亜と回教徒／シヨウ翁の回教観その他：下」	11507	19371227	1	
浦亭生		「オマール雑録 12：アラビヤの文部大臣」	11514	19380109	5	「浦亭」は筆名、本名不明。
		「防共と友邦提携／新政権絶対支持の二省回教徒代表」	11515	19380111	3	新疆省と青海省の動向。
浦亭生		「オマール雑録 13：アラビヤの文部大臣(続き)」	11520	19380116	5	「浦亭」は筆名、本名不明。
		「協和会指導の下にハルビン宗教連盟結成／三十余民族の各宗教を融合／全宗団の非常時動員」	11534	19380202	2	
		「ケルバンガリー氏／条約上の協定のみでは効果は充分でない／各宗教は防共の聖戦に起て／回教と日本宗教の提携叫ぶ」	11540	19380209	3	
		「新疆五馬連盟遂に蹶起か／回教民族の防共と宗教擁護／蜿々四千里の支那辺境の風雲急」	11544	19380215	2	
		「中国回教総連合会／北京懷仁堂で結成」	11544	19380215	2	
		「防共日満支の提携／回教徒ブロック強化の民族的宗教運動／全満二百万教徒動く」	11552	19380224	2	
		「印度教と回々教の闘争を巧に利用／英国の対印政策／印度独立運動は何処へ行く？」	11554	19380226	3	
		「北京街頭で示威行進／中国回教総連」	11560	19380305	3	
須田正継		「埃及皇帝の御慶事／回教精神に燃たる埃及青年」	11564	19380310	1	

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

		「北滿回教徒反共に敢然と起つ／支那回教徒とも提携し／所期の目的達成に邁進」	11565	19380311	1	
		「今夏北京で東洋全回教徒会議／在日回教徒立つ」	11576	19380325	2	
		「最初の東京回教礼拝堂／愈よ堂々たる偉容出現／世界各国の教徒代表参列／教祖誕生日に晴れの竣功式」	11578	19380327	3	写真あり。
		「初めて出版される全邦訳のコーラン／在留回教徒の努力で」	11578	19380327	3	文中に「東京平凡社から義侠的な意味で出版することとなり準備中」とある。
		「錦州回教徒／排共大会挙行／宣言決議を可決」	11581	19380331	3	
		「辺疆回教徒一千万／独立政権樹立の機運／反蔣熱益々激化」	11583	19380402	2	
		「吉林回教徒排共大会／決議文を河北新政府に提出」	11585	19380405	2	
五十嵐賢隆	奉天市公署学務般長	「回々教を語る：1」	11586	19380406	1	
五十嵐賢隆	奉天市公署学務般長	「回々教を語る：2」	11587	19380407	1	
五十嵐賢隆	奉天市公署学務般長	「回々教を語る：3」	11588	19380408	1	
		「北支の宗教運動は回教問題が第一／尾崎亘氏の帰来談」	11588	19380408	4	尾崎亘は、大東文化協会研究部幹事。
五十嵐賢隆	奉天市公署学務般長	「回々教を語る：4」	11589	19380409	1	
沛亭		「回教観」	11590	19380410	6	「沛亭」は筆名、本名不明。
		「愈々回教連合軍蹶起し／反共の烽火を挙げる新疆省」	11590	19380410	6	
沛亭		「韃靼」	11596	19380417	4	「沛亭」は筆名、本名不明。
中外読者倶楽部		「アラビアの情勢とその人情風俗を聴く」	11596	19380417	3	中外読者倶楽部主催の座談会の広告。4月25日、京都新島会館にて。講師は「アラビア貴族 細川将」。
		「回教国独立近し／反蔣に蹶起／極東のタートル立つ」	11596	19380417	4	
中外読者倶楽部		「アラビアの情勢とその人情風俗を聴く」	11600	19380422	3	中外読者倶楽部主催の座談会の広告。
		「絶対に日本ビイキのアラビアに関心を持って／雨露を全然知らぬ民族／“アラビアを聞く”夕べ／中外読者倶楽部」	11604	19380428	3	写真あり。
		「回教徒の防共旗幟燦然／東亜の和平確立に重大な役割演ず／「支那西北角」に起つた／五馬反蔣運動愈々顕著」	11606	19380501	3	
		「“回教民族との提携は語学から”／アラビア、トルコ語講習会／イスラム文化協会が」	11606	19380501	3	文中に「アラビア語の講師はアラビアの元政府役員で昨年末来朝同協会嘱託たるトウフ イツク・エル・シエリーフ氏、トルコ語の方は協会常務理事内藤智秀氏が初歩を、其後は前記エルシエリーフ氏」とある。
		「アラビア雑話／細川将氏の談話から」	11606	19380501	7	中外読者倶楽部主催の座談会。写真あり。
		「東京の回教礼拝堂／晴れの落慶式／来る十日から十五日間／各国教徒代表参列」	11607	19380503	3	

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二八二

		「アラーの神に祈る防共／近東各国祝賀使節迎へ／回教礼拝堂落慶の歓び」	11617	19380514	3	写真あり。
		「けふ、歓迎園遊会／「大日本回教協会」主催」	11617	19380514	3	
		「全回教民族代表歓迎会」	11618	19380515	3	
		「今週のニュース解説／支那回教徒の倒蔣防共運動」	11624	19380522	2	
		「我が大陸政策の成否／アジア回教徒を如何するかで決る／世界回教運動の審議機関／総連合会を東京に作れ」	11626	19380525	2	中国回教総連合会顧問・華北大学教授小池定雄の談話。
		「反共運動展開に回教青年団結成／華北連合総部が訓練所開設／幹部の猛訓練始む」	11627	19380526	3	
		「防共の大旗「東亜回教大会」／今秋開催、計画進む」	11632	19380601	3	中国回教総連合会の計画か。
		「対ラマ、回教工作に我が専門学者招聘／蒙疆自治政府の宗教対策具体化」	11632	19380601	3	東北帝大教授の多田等観（チベット語）を顧問として招聘予定。
		「満洲回教徒は日本軍に献金／小村不二男氏談」	11642	19380612	6	満洲国政府司法部の小村不二男の談話。
		「辺疆民族に及ぼす対回教策／善隣協会が先づ調査研究機関設く」	11643	19380614	3	回教圏攷究所のこと。
小村不二男	満洲司法部 翻訳官	「東洋平和と回教民族」	11660	19380703	7	
		「回教知識普及に日本最初の講習会／十五日から五日間／日本青年会館で」	11665	19380709	2	回教圏攷究所主催の講習会。
ボース、ラス ビハリ	印度革命志士	「新興トルコ」	11678	19380724	1	
ボース、ラス ビハリ	印度革命志士	「新興トルコ」	11679	19380726	1	
		「回教との提携図る／本門法華妙蓮寺の皇軍慰問団／入蒙の計画進む」	11694	19380812	3	本門法華宗大本山妙蓮寺の動向。
		「赤色ルートの死活線／その去就が重要視される／新疆省の回教徒」	11702	19380821	2	
		「従来の慣例脱し回教学校の増設／日回提携注目さる」	11710	19380831	3	張家口の小村不二男から、回教学校での日本語教育についての報告。
		「回教事情調査に専門家初の派遣／回教圏攷究所の小林氏ら／北支、蒙疆、満洲へ」	11710	19380831	4	文中に「吾が大陸政策上愈よ重要視されるに至つた回教事情調査のため蓋し吾国最初の学的専門の調査隊が派遣されることになり、東京の回教圏攷究所調査部長小林元氏は陸軍参謀本部囑託として助手井岡峻〔峻一〕（國學院大學出身前記攷究所研究生）を帯同、去る二十九日午後三時東京駅発、先づ北支に向け出立した。一行は北支、蒙疆並に満洲の各地に於て約二ヶ月右の調査を果し十月下旬帰国の予定」とある。
		「教育に便宜を図る伊太利の回教政策／英仏に大衝撃与ふ」	11712	19380902	2	エチオピアの動向。
		「回教との提携志す／本門法華妙蓮寺皇軍慰問団／いよいよ入蒙す」	11716	19380907	3	
		「コーラン全訳成り／回教研究雑誌増加／外務省も頗る熱心」	11727	19380920	2	外務省調査部『回教事情』、イスラム文化協会『イスラム』、回教圏攷究所『回教圏』のこと。

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

		「読書界／全邦訳の香蘭経」	11731	19380924	8	有賀文八郎・高橋五郎訳『聖香蘭経』。
ボース・ラスビハリ	印度志士	「パレスタインに於る英国の分割統治案」	11737	19381002	1	
		「アラビア語版『日本』誌の反響／“これこそ歪められざる躍進日本の真姿”と好評」	11744	19381011	3	イスラム文化協会が1938年2月に刊行した書籍について紹介。
		「民族的にも教徒的にも画期的重大会議？／目下埃及カイロに開催中の回教民族大会（アラビア連合大会）」	11744	19381011	3	
		「宗団法／大陸の宗教経営が立案の第一目標／回教等にも新しく適用／緊急提出の理由」	11766	19381108	2	「宗団法」は宗教団体のこと。
		「綏遠に観る東、西／回教圏の接点／だが北支、蒙疆の教徒は沈滞／小林元氏調査収獲」	11779	19381123	3	文中に「軍囑託として二ヶ月に亘り北支蒙疆、満洲の回教事情並に同史蹟を調査、視察」。
		「国策の線に沿ひ／回教の研究／外務省後援で埃及へ留学／浄宗の後藤信巖氏」	11783	19381129	3	「浄宗」は浄土宗のこと。後藤は大正大学仏教学科第7回、1935年3月卒業。1938年12月8日に神戸を出港して、3年間の予定でアズハル大学留学とある。
小村不二男	於白厚秘市	「回教漫筆」	11813	19390108	6-7	
小村不二男		「回教の神秘／断食三十日：1」	11814	19390110	2	
小村不二男		「回教の神秘／断食三十日：2」	11815	19390111	2	
小村不二男		「回教の神秘／断食三十日：3」	11816	19390112	2	
小村不二男		「回教の神秘／断食三十日：4」	11817	19390113	2	
小村不二男		「回教の神秘／断食三十日：5」	11818	19390114	2	
		「貴衆両院その他に果敢な回教公認運動／「大日本回教協会」から／宗団法の修正運動起る」	11846	19390217	2	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：1」	11849	19390221	1	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：2」	11850	19390222	1	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：3」	11851	19390223	1	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：4」	11852	19390224	1	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：5」	11853	19390225	1	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：6」	11854	19390226	1	
		「赤魔の罪悪を闡明し蔭に容共の非促す／中国回教総会の宣言」	11854	19390226	2	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：7」	11855	19390228	1	
藤沢孝夫	龍谷大学教授	「薔薇物語／其の一 ベルシアの花：8」	11856	19390301	1	
		「宗団法／回教公認問題で論戦／ラマ教、印度教も公認せよ／衆院・第一回特別委員会」	11858	19390303	2	第74回帝国議会における3月1日の宗教団体法特別委員会第1回の模様。板垣陸相、荒木文相、鶴見祐輔、清水外務政務次官らの発言が掲載。

二八一

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二八〇

		「宗団法審議の見透し／教師資格問題と共に回教公認が論戰的／安藤衆議院特別委員長談」	11859	19390304	2	
		「大陸国策の見地より回教公認運動熾烈／愛国陣営十団体より当局に要望書提出」	11862	19390308	2	
		「日本回教徒生活を映画に」	11863	19390309	3	映画芸術社が製作中とある。
		「単立教会として免税／実質的に法人の取扱／政府に言明考慮を協議／回教中心に委員懇談会」	11866	19390312	2	
外務省情報部		「世界回教民族の現勢」	11871	19390318	4	『週報』126号より転載。
		「回教公認を決議／けふ、愛国団体が発起／緊急有志大会開く」	11871	19390318	4	黒竜会、政教社、愛国社など20団体が、日比谷公園松本楼で「回教問題有志大会」を開催。
外務省情報部		「世界回教民族の現勢」	11872	19390319	4	『週報』126号より転載。
		「反蔣、防共を標榜し回教徒、辺境に蹶起／赤色ルートを脅かす」	11872	19390319	4	
外務省情報部		「世界回教民族の現勢」	11873	19390321	4	『週報』126号より転載。
		「宗団法／現下国際情勢から回教追加は当然／両院有志ら決議」	11873	19390321	2	回教問題有志大会にて、北玲吉らと回教関係者が決議。
		「懸案の宗教団体法目出度成立を告ぐ／きのふ、衆院本会議／回教取扱いに對し文相、所信を披露／最終委員会の経過」	11875	19390324	2	
		「回教の公認を／アラビア宗教相キブシ氏／小山衆院議長に要望」	11875	19390324	2	
		「宗教団体法成立に聴く／危機を孕んだ回教問題／所謂表面的には政治的解決／安藤宗団法委員長を語る」	11876	19390325	2	
安藤正純	宗教団体法委員長	「宗教団体法特別委員会報告演説／並に国有寺院境内地譲与法：上」	11877	19390326	1	
		「大日本防共同志会／宗教による防共の一線をふくめて／日独同志会が改称・内容拡大／五月神戸で初会議」	11880	19390330	2	「その対外的な事業としては……宗教団体による運動イ、回教ロ、印度教ハ、仏教ニ、基督教」とある。
		「河瀬蘇北著／近代回教思潮／中外日報出版部」	11881	19390331	4	広告。
小村不二男	蒙疆厚和回教青年学会に於いて	「回教徒の“犠牲祭”」	11883	19390402	1	
		「大陸の辺境新疆から天山の嶮歩む三年／容共蔣政權の魔手逃れ／回教徒十三名来朝」	11883	19390402	2	
		「イ国宗教大臣近く帰国」	11885	19390406	2	イエメン王国の宗教大臣アル・キブシーのこと。
		「東方文化学院内に「回教圏研究所」設立／現地の研究を主に研究員派遣／東洋史の権威白鳥博士が」	11894	19390416	3	白鳥庫吉が主宰。同名の研究機関とは別組織。
		「事変後占領地内から最初のメツカ巡礼／英ソ仏へ回教徒の反抗」	11894	19390416	3	中国回教総連合会河北総務部長の唐易熙ら5名が巡礼。
		「日蒙回教徒握手／東京で歓迎会」	11900	19390423	2	蒙古回教徒の視察団の石金附らが4月21日東京着。有賀文八郎の「教会（東京渋谷笹塚町）」に於いて歓迎会が開催。
		「預言者出現に集ふ信者たちの質問宛ら／蘇峰翁を囲むの夜／名古屋中外俱樂部の催」	11900	19390423	6	小見出し「皇室中心主義で回教も開教し得よう」あり。

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

		「山東省を中心に東亜宗教団体連盟／支那各宗教の団結成る」	11905	19390429	2	回教団体も加盟。
		「赤色ルートと回教徒／赤色援蔣ルート」	11909	19390505	4	『週報』5月3日号掲載の外務省情報部発表「赤色援蔣ルートに依る」の紹介。
		「回教徒との提携は防共政策の焦眉の急／東方文化連盟主催回教協会理事者招待会」	11909	19390505	4	大日本回教協会の松島肇、匝瑳胤次、松室孝良らを招待した会合。
		「宗教団体を政府や議会は如何見たか？／杉山代議士を囲む会にて」	11917	19390514	6-7	杉山元治郎。小見出し「回教を入れよ入れぬで委員会は果し□□□あり。□は判読不能。
		「回教民族対策大講演会開く」	11937	19390607	2	大日本回教協会の主催による。
		「蒙疆へ来る者はまづ回教徒の習俗を知れ／風俗無視の危険性から／厚和領事館が通告発す」	11942	19390613	2	
		「メツカを中心としてデマ放送の支那回教徒／“速に回教対策を樹てよ！”／回教民族対策講演会盛大」	11943	19390614	3	6月12日に大阪市中之島中央公会堂で開催された大日本回教協会主催による同協会調査部長・海軍少将の匝瑳胤次の講演「世界回教徒の現況」について。
		「見よこの人類の争闘場／地球皮面の嵐は激し／ヨーロッパの好対陣を語る」	11947	19390618	6-7	小見出し「英仏の対伊独包圍陣の現状は？」、「トルコの英仏への参加」あり。
		「一致排撃共産党の下」／中国回教徒の組織化／最近の調査で信徒五千万」	11954	19390627	2	
		「仏教徒が大多数／重大な動きを見せる回教／内地宗教界の活動要望／蒙古の宗教事情」	11957	19390630	4	
		「印度の回教連盟と連邦制」	11974	19390720	1	
		「府県当局の指示で更に積極的方針へ／大日本回教協会」	11976	19390722	2	文中に「国民一般の輿論喚起をつとめると共に南洋アフガニスタン、トルコ、イランの各国回教徒に働きかけ日本の真意を明らかにしてあるが、今回同協会では各府県当局にこれが後援で要望」とある。
		「“回教諸国を日本に親善協力せしめよ”／宗教の理解を通じて／有賀文八郎氏談」	11983	19390730	4	
		「三億の回教諸民族に文化、経済の働きかけ／大日本回教協会が愈よ／今秋京都にも支部設立」	11984	19390801	3	
五十嵐賢隆	奉天	「満洲国宗教行政／その展望と研究及対策：9」	11989	19390806	1	回教対策の私案について記述あり。
		「中国四億の民衆は如何なる宗教生活をするか／愈よ興亜院の依頼うけて／けふ、宇野博士ら調査に出発」	11993	19390811	2	宗教学者の石橋智信（東京帝大教授）と宇野円空（同助教授）の調査旅行。記事で宇野が「中国の現代宗教の宗教については種々きいて居る。……回教があり儒教についても非常に大きな調査対象たるものがある」と発言する。
		「北支回教徒統一近し／日本に対する信頼／世界的に勃興の勢力」	12024	19390916	2	中華民国の「臨時政府管轄のもとにある回教総会」の調査部研究員・津吉孝雄（京大東洋史卒）の談話。現地での回教研究と回教青年会の教官として従事。

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

		「人材枯渇を打開せずば大陸の宗教工作は困難／興亜院の依頼で調査終る／石橋智信博士の視察談」	12026	19390919	2	回教についても言及。
		「一万の教徒反英に立つ／山東に回教連合会結成」	12029	19390922	2	
		「今秋東京と大阪で回教圏展覧会／回教圏よりも代表来朝」	12032	19390926	3	
		「大陸の宗教工作は目下その緒に着いた程度／内地教界の刷新と併行が緊要／相原宗務官の視察談」	12040	19391005	2	相原一郎介（文部省宗教局宗務官）の談話。石橋智信・宇野円空との調査に同行。回教についても言及。
爬羅彦		「国際放談」	12046	19391012	1	コラム欄。バルカン問題など。
		「晋北仏教学院生／厚和へ修学旅行」	12047	19391013	3	回教寺院、回教小学校、回教青年学校等を見学したとある。
		「印度の独立は印度教・回教の協力にあり／ガンジー翁は叫ぶ」	12066	19391107	2	
		「四魂一道／大陸の宗教工作に就て」	12074	19391117	1	回教の記述あり。
		「各国代表との交遊兼ね商都大阪に回教徒大会／大阪回教寺院の建立や将来の布教その他協議」	12074	19391117	2	回教寺院の立地について、文中に「既に某所に敷地の選定も終つた」とある。
		「コーラン高らかに親善提携はかる／東京で開かれた我国初の回教徒大会」	12077	19391120	3	11月18日、東京丸ノ内の日本クラブで開催された「世界回教徒第一回大会」。
		「“親善なんて糞食へ…だ”／あまりに無理解な！／回々教団各国代表者の案内指導者に非難の声」	12089	19391205	3	
		「宗教的犯罪増加の時代的傾向に鑑み／回教問題に当局注視」	12100	19391218	2	日本国内のこと。「当局」は何を指すかは未記述。
		「京城の回教徒に理解ある保護を／小林由太郎氏談」	12146	19400216	3	小林由太郎は、小村不二男（興亜協進会囑託、厚和回教青年学校指導官）の実父。京城には200人のタタール人が在住と談。不二男を助けるため京城から厚和へ近日転居予定とのこと。
		「回教圏国と結ぶ親善／「日本・イエーメン協会」誕生／キ宗教大臣に“行賞”」	12169	19400314	3	宗教大臣アル・キブシーのこと。
松木定敏	満洲国民生部事務官	「満洲国の宗教〔第〕四〔章〕、イスラム教：〔1〕」	12177	19400325	3	
		「印度連邦案可決／自治を要求／回教徒大会で決議」	12179	19400327	2	ラホールにて3月24日に開催された全印回教徒連盟大会での決議。
松木定敏	満洲国民生部事務官	「満洲国の宗教〔第〕四〔章〕、イスラム教：〔2〕」	12183	19400331	3	
松木定敏	満洲国民生部事務官	「満洲国の宗教〔第〕四〔章〕、イスラム教：〔3〕」	12188	19400407	3	
松木定敏	満洲国民生部事務官	「満洲国の宗教〔第〕四〔章〕、イスラム教：〔4〕」	12194	19400414	3	
		「今日の印度／手島少佐語る：3」	12254	19400626	3	小見出し「回教徒」あり。
		「回教圏を聴く／日本の動き敏感／南方の自由解放運動一段と活発」	12263	19400706	2	大久保幸次の談話。
		「東亜の新秩序建設と回々教への対策／我国体精神との関係につき／回教協会が研究発表」	12279	19400725	2	大日本回教協会が原正男に依頼した原稿が提出され、近く出版との内容。

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二七八

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

		「日本上代文化の研究会」	12325	19400917	3	日本上代文化の研究を通して皇道を宣揚する「イコトハ会」の研究会。9月25日日本貿易会館で実施。遠藤隆夫「回教教徒より見たモーゼ・クリスト・マホメット」ほか。
		「回教研究書」	12327	19400919	2	
角野達堂	仏教専門学校教授	「支那回教研究の課題：1」	12339	19401004	1	
角野達堂	仏教専門学校教授	「支那回教研究の課題：2」	12340	19401005	1	
角野達堂	仏教専門学校教授	「支那回教研究の課題：3」	12341	19401006	1	
		「日本に好意を寄せる四億の回教徒と結べ／これこそ大東亜共栄圏建設への重要な問題だ」	12391	19401208	3	12月5日神田共生講堂にて大日本回教協会主催で現役外交官による近東諸国事情の講演会を開催。記事では会長の林銑十郎の発言が紹介。
宇野円空		「蘭印の宗教：3」	12435	19410204	1	回教の記述あり。
		「蘭印の回教問題／明治聖徳記念学会研究発表」	12448	19410220	3	2月23日学士会館で財団法人明治聖徳記念学会による月例の研究会。宮武正道「蘭印の回教について」ほか。
		「印度から回教使節／初めて我国へ派遣」	12455	19410228	3	文中に「我国の回教普及に努力を続けてゐる大日本イスラム教団連合会副会長、東京イスラム教団副長エツチ・イスマイル氏は今度印度のデリーに赴き回教の最高指導幹部5名を日本に案内するため来月十日頃旅立つ事になった。従来トルコ、イエーメン、エジプトからの回教使節はしばしば来朝したことがあるが印度からの代表派遣は今回が初めて」とある。
西本穎	京大教授	「満洲国宗教論」	12470	19410318	1	小見出し「回教の特色は其の世界性に」あり。
		「外国系教育機関を全部政府に接収／イラン国教育制度統一」	12491	19410413	3	
西本穎	京都帝国大学教授	「東亜共栄圏に於る宗教国策：中」	12493	19410416	1	外地の宗教対策について、各宗教別での私案を提示。回教あり。
		「馬來語講習会」	12505	19410502	3	大阪市真宗青年会興亜部主催、大阪市東区の旧大谷会館において。講師は大阪外語出身の中村一夫。マレー人の会話講師は交渉中とある。
		「外人も加へて／今夏、東亜共栄圏講座」	12507	19410504	2	大政翼賛会東亜局の事業計画。「回教圏」に関する講義も予定。
千家尊建		「信仰、信念一元性」	12510	19410508	1	文中に「マホメット」の語句あり。
イブラヒム		「新聞の新聞」	12510	19410508	4	コラム欄。
		「イラク、英に宣戦／完全なる成功望む／在日本印度国民会長／エ・エム・サハイ氏声明」	12510	19410508	4	

二七七

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二七六

		「英国のため闘ふ者はコーランを裏切るもの／回教司教長・印度へ呼びかく」	12511	19410509	3	文中に「イラクの対英開戦に 応じエルサレムに亡命中の回 教司教長は左の如く布告を発 し全アラビア人の蹶起を慫慂 してゐると伝へられる」とあ る。
		「イラク支援要請／在日本印度独立連 盟決議」	12511	19410509	3	
		「イラクを救へ／中国回教徒も起つ」	12557	19410516	2	5月13日、中国回教徒総連合 会はイラクのガイラニ総理大 臣に激励の電報を送信。20日、 同会で中国各地の回教徒代表 を集めて「救援イラク国大会」 を開催とある。
		「満洲国回教は物凄い発展振り／河瀬 甚吉氏の土産話」	12558	19410517	3	河瀬甚吉が満洲で実施した商 工業調査の際に、聴取した回 教事情についての談話。
		「イラクを救援／中国回教連決議」	12524	19410524	3	
		「大陸の宗教情勢を一日に／『華北宗 教年鑑』発行さる／武田調査官苦心の 編纂」	12528	19410529	2	興亜院華北連絡部の武田調 査官が中心となり、北京の興 亜宗教協会より発行した年鑑。 同書の第4篇は「回教」。
		「“イスラムの戦士よ！悪魔の英軍を討 滅せよ”／在日イブラヒム会長飛徹」	12534	19410605	3	大日本イスラム教連合会長の アブドゥルレシト・イブラヒ ムのこと。
		「僧侶生活の刷新／宗教儀式の改革／ イランを語る座談会」	12535	19410606	2	興亜問題研究所主催で依田隆 吉との座談会について。
		「仏教は団結力がない／回教にはそれ が強い／回教協会長 林銑十郎大将 談」	12539	19410611	2	
		「イラク同志を激励／満洲回教協会が 近く役員会開く」	12539	19410611	2	
		「愛国心に燃ゆるイラン文化に注視／ 中山前駐イラン公使談」	12541	19410613	4	3年間のイラン公使を辞して 帰国した中山詳一の談話。
		「短信一束／北京の宗教界」	12554	19410628	2	小見出し「回々教大講演会」 あり。
		「甘粛省／円満解決見込立たぬ／回教 徒の大叛乱／奇襲部隊で猛撃」	12554	19410628	3	
		「世界動乱の裏面に描く・二大宗教の 動き／回教・カ教に注目」	12563	19410709	2	薬学研究の麻布久羅吉の談 話。
		「イラン国支援／亜細亜人に訴ふ／印 度独立連決議」	12595	19410815	2	
		「世界動乱と弦月旗／英ソ両国の侵攻 で三億回教徒の動向／回教圏研究所に 対策を聴く」	12609	19410831	2	
徳沢竜譚		「イラン文化のおもしろさ」	12611	19410903	4	
		「トルコ版“日本文化史”／愈よ今年中 に刊行されん」	12613	19410905	3	回教圏研究所より刊行予定 (ただし未刊)。
		「蒙古政府内に回教委員会」	12633	19410930	2	
		「中国における初の企／第一次華北宗 教年鑑編纂／武田調査官苦心の労作成 る」	12639	19411007	3	同書の第4篇は「回教」。
		「南方談叢／古い習慣に生く南洋回教 徒の群／和蘭も順応政策を採る」	12715	19420113	3	京都市経済部商工課長渡辺清 太郎の談話。1930年から1936 年まで南方・中国など各地に 駐在。
		「南方談叢／ジャバは世界の楽土／京 都の土用より爽快／華僑の統御が文化 工作の重点」	12716	19420114	3	貿易商の寺田普二郎の談話。

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

		「天津の米英打倒大会／回教徒叫ぶ」	12723	19420122	2	1月11日、中国回教徒総連合会華北天津区本部の主催で、在津回民代表大会が開催。
		「興味津々の南洋／本社ペン光る座談会：[1]」	12727	19420127	2	中外日報社主催の座談会で、豊田清三郎がマレー・蘭印の回教徒などについて話題を提供。ほかの人物からの発題もあり。
		「“アジア人のアジア”／建設謳ふ、民族の祭典／大阪の全亜細亞民族大会」	12727	19420127	2	1月24日大阪中央公会堂で開催。マレー代表（ナザール）、アラビア代表（タシカンデイ）、トルコ・タタール代表（ガヂツツ・アリ）、蘭印・インドナシア代表（ステイビヨ）、イラン代表（ホンヂ）らが参加。
		「大東亜建設／“良き強き妻”なり／蒙古回教婦人が協力／厚和イスラム婦女協会結成」	12730	19420130	2	
		「回教を聴く」	12738	19420208	3	2月14日、東京渋谷の福昌寺にて、大道社主催の会合。同社社長の林銑十郎が講演。同社は神道家の川合清丸の創立で、林が復活させた。
		「共栄圏各民族代表集ひ／亜細亞民族の奉祝大会／紀元の佳節神戸市で開催」	12738	19420208	3	亜細亞民族第5回奉祝大会、2月3日、亜細亞倶楽部の主催で、神戸商工会議所にて開催。回教徒代表のカズス・アリ（イデル・ウラル・トルコタタール文化協会神戸支部長）、汎アラビア代表のエム・エム・タンカデイ（大阪外語学校講師、メッカ出身）ほか。
大久保幸次		「回教の本義とその現勢／斯界の権威、回教圏研究所長／大久保幸次氏に訊く：[1]」	12744	19420217	3	初回のみ「回教の本義とその現勢」。
大久保幸次		「回教の本義と現勢／大久保幸次氏に訊く：[2] 南洋問題との関連／甘肅、新疆の教徒と我国」	12745	19420218	3	
大久保幸次		「回教の本義と現勢／大久保幸次氏に訊く：[3] 教祖としての本質／メッカ時代十三年間に培ひ育てられた」	12746	19420219	3	
大久保幸次		「回教の本義と現勢／大久保幸次氏に訊く：[4] イスラムとは平和と婦依だ」	12747	19420220	3	
大久保幸次		「回教の本義と現勢／大久保幸次氏に訊く：[5] アラーは人類の為の一神／産まず、生れず無始無終の靈格」	12748	19420221	3	
大久保幸次		「回教の本義と現勢／大久保幸次氏に訊く：[6] “メッカ”への憧れ／全回教徒結束の楔」	12749	19420222	3	
大久保幸次		「回教の本義と現勢／大久保幸次氏に訊く：[7] 誤れる一夫多妻の觀念／正しくはコーランに視よ」	12750	19420224	3	
大久保幸次		「回教の本義と現勢／大久保幸次氏に訊く：[8] 回教徒団結の現代的意義／婦人解放はウエル除去から」	12751	19420225	3	
		「日本に信頼しアラビア独立へ／“アジア回教徒の父起つ”」	12752	19420226	2	エミエレ・エル・フツセイニのこと。
		「元イラン公使鈴木氏中心に／南方宗教問題研究」	12760	19420307	3	
宇野円空	東京帝国大学教授、文学博士	「南方への宗教工作／宇野円空：[1]」	12761	19420308	1	回教の記述あり。

二七五

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二七四

		「南方民族と回教／松島肇氏迎へて／京都ホテルで懇談会」	12767	19420315	3	
		「東印度回教徒起つ／皇軍へ積極的協力」	12769	19420318	2	
		「宗教対策の成否が南方経営自体を左右／特に回教問題の重要性／笠間杲雄氏談」	12770	19420319	2	3月16日、東亜宗教懇談会主催による日比谷松本楼での元イラン公使笠間杲雄との座談会。
		「回教協会京都支部設立／松島理事長迎へ京都懇談会」	12772	19420321	2	大日本回教協会。
		「京都と回教／古い因縁／新村出博士語る」	12772	19420321	2	
		「回教問題の重要性／松島肇氏談：上」	12773	19420324	4	
		「回教問題の重要性／松島肇氏談：下」	12774	19420325	4	
		「回教断想／海軍中佐早川成治氏談：1」	12775	19420326	4	
		「回教断想／海軍中佐早川成治氏談：2」	12776	19420327	4	
		「回教断想／海軍中佐早川成治氏談：3」	12777	19420328	4	
		「参戦には絶対反対／ガンジー、クリップスに回答／回教徒の動静微妙／英本国案に不満」	12778	19420329	2	3月25日、英特使クリップスとインド国民会議議長派アザツドが会見。
西城春夫		「印度宗教圏」	12789	19420412	2	
		「アジア人として／大東亜戦争の進展に期待／イランの真相語る／市河公使」	12812	19420512	2	イランの対日国交断絶のため、市河イラン公使と村沢陸軍武官は帰国。4月24日テヘランを出発、5月9日ハルビン着。
		「イランの実情／市河前公使に聴く」	12830	19420602	2	
		「回教国に対する施策に就て」	12836	19420609	1	
		「回教研究の行き過ぎ宗教的宣伝に注意せよ／内地人への一般化は危険」	12849	19420624	2	発言者の氏名は未記載。
		「印度／回教／両教徒の団結／合同会議で宣言」	12850	19420625	2	6月21日、インドでヒンズー教派と回教徒連盟は合同会議を開き、団結に関する宣言案を可決。
		「回教問題は対外的／内地人の信仰は具体的に不能／大日本回教協会匝瑳常任理事長談」	12851	19420626	3	大日本回教協会常任理事・調査部長の海軍少将匝瑳胤次。
		「南方回教の諸問題／匝瑳少将に聴く：1 教義が社会機構」	12852	19420627	2	大日本回教協会調査部長の海軍少将匝瑳胤次。
		「禍根を未然に防ぐ／回教の公認問題に関し／各関係当局に反対を具申」	12853	19420628	2	大日本回教協会京都支部が6月24日に発足して、京都入りした会長の林銑十郎に、山下彬磨が意見を具申。
		「南方回教圏の諸問題／匝瑳少将に聴く：2 回教だけ独立は痛」	12853	19420628	2	大日本回教協会常任理事・調査部長の海軍少将匝瑳胤次。
		「回教問題の重要性／現地民族の中に指導対策を練れ／中川裕氏談」	12854	19420630	2	
		「笠間公使中心に／南方宗教問題を研究／浄宗東亜宗教調査室が」	12854	19420630	2	
山下彬磨		「国内に於る回教対策／対策理念転換の急務」	12855	19420701	1	
古野清人		「中外戦線／回教民族の結合」	12860	19420707	1	コラム欄。
		「ガンジー会議派の決意／回教諸国の民族運動熾烈／“英国を援助せず”」	12860	19420707	2	

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

		「我国が初めて接する回教民族／理解は必要・下手な対策禁物／元公使、笠間泉雄氏語る」	12864	19420711	2	7月7日、増上寺聡和殿で開催された浄土宗大東亜宗教事情調査室の研究會にて講演。
		「全アラビア回教徒の宿願達成を約す／ム首相、フツセニ師へ」	12867	19420715	2	ムッソリーニ、ドイツに亡命中のエルサレム大法官フツセニに電報を送信。
		「政教両頭主義の「アラブ」国家建設／西亜大同団結の機運」	12875	19420724	2	7月15日、ヒトラーとガイラニが会見。ガイラニを政治的首班とし、エルサレム大司教フツセニ師を宗教的首班として、イラク・シリア・パレスチナ・トランスヨルダンの大同団結を目指す動き。
倉田百三		「中外戦線／トルコの態度」	12876	19420725	1	コラム欄。
		「南方文化工作の理念と軍の態度／南方文化工作座談会：4」	12880	19420730	1	小見出し「回教の特性と対策／儀礼と信仰に就いて」。
		「回教文化の総合研究／ジャバに図書館と研究所／回教徒間に好反響起す」	12897	19420819	2	ジャワ軍政監部はバタビヤ市7番街15番地に、軍政監部文教課直属の回教文化図書館と回教文化研究所を設立。研究員はモハマイディア協会長のハツジマンズールサーリカットほか計60名とある。
		「重慶対支那回教軍／一戦交へるか／西北中央化問題紛糾」	12900	19420823	2	
		「国民政府樹立には如何なる宗派とも協力／インド回教徒連の言明」	12900	19420823	2	
		「回、印教徒は団結蹶起し／圧政者、英を放逐せよ／フツセニ大法官、印度へ叫ぶ」	12903	19420826	2	イタリアに亡命中のエルサレム大法官フツセニは、インドに向かってラジオ演説。
		「晋北民衆に示す／結婚年齢は満十五歳以上／回教徒が率先実施」	12903	19420826	2	
		「回教問題講習／奉天回教研で開催」	12907	19420830	2	8月20日から26日まで奉天回教研究會で回教問題講習會を実施。講師は山岡光太郎、宮崎専一、中野清一、太宰松三郎ほか、参加者100名。
古野清人		「中外戦線／印度のイスラム問題」	12908	19420901	1	コラム欄。
		「回教と提携し支那古刹の復興／北支濟寧に描く／西本願寺中心の大東亜調」	12916	19420910	3	浄土真宗本願寺派の池尻糸導の報告による。
		「八紘為宇を世界に顕現／仏、カ、回三教を通して／高見代議士の宗教思想戦進捗」	12943	19421013	2	高見之通代議士が、8月末から9月にかけて満洲を視察した模様を報告。
夏		「満洲寺廟巡礼：7 満洲回教協会本部／新京清真寺を訪ふ／きびしい戒律語る沐浴室」	12944	19421014	4	「夏」の本名は不明。
		「回教寺院を見学／回教協会京都支部」	12945	19421015	3	大日本回教協会京都支部の主催で、10月16日、神戸モスク見学。
		「日本最初の回教圏西南亜語辞典編纂」	12946	19421016	3	大阪外国語學校が外務省の後援を得て、西南アジア語研究所を開設。文中に「日本最初のペルシア語、アラビア語、トルコ語の辞典、文法書の編纂が進められてゐる」とある。
		「全西亜、印度の回教徒大同団結／反英運動を策す」	12947	19421017	3	

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

二七二

		「回教に理解と好遇／日本の動向を語る／帰国した回教大学教授」	12958	19421101	2	アズハル回教大学教授オマル・アブドラーは、1941年1月に駐日回教徒代表として来日。1942年10月中旬の引揚船で帰国した。
		「回教研究に総力結集を要望／近く具体化せん」	12960	19421105	3	要望した人物は未記名。
		「同願会と同じ組織／基教、回教にも望む／在京七日／武田調査官の感想」	12964	19421110	2	大東亜調査官の武田熙の談話。改組前は興亜院華北連絡部に所屬。
		「南方回教徒に就いて聴く」	12969	19421115	2	大日本仏教会で小林哲夫が談話。
		「牛一頭供へて／神戸回教徒ら犠牲祭」	12998	19421220	3	
		「回教や紅卍字会と提携し大東亜文化の建設に協力／中支宗教大同連盟の新計画」	13021	19430121	2	
		「大東亜戦完遂と回教民族／四王天延孝氏語る」	13025	19430125	1	
		「林銃一郎大将」	13035	19430206	2	訃報記事。死去時、大日本興亜同盟総裁、大日本武徳会長、大日本回教協会会長、大道社長。
		「米英の圧迫から回教徒を解放／谷外相の決意闡明」	13039	19430211	2	
		「全世界の回教徒対策／四王天代議士の質問書に答へ／外務、大東亜両相から明示」	13047	19430221	3	
		「大東亜共栄圏内の回教徒と共存共栄のために相互理解深化へ／四王天延孝氏」	13050	19430225	1	2月23日、衆議院本会議における質問。
		「敵米英撃滅へ／満洲回々教徒の新たな決意」	13074	19430325	2	
		「巫女舞に似たモロ族の踊り／比島〇〇部隊松島氏の便り」	13082	19430403	3	
		「狼英の奸策に抗して起ち上がった印度民族／独立の鍵は回・印両教の団結／本間中将談」	13110	19430509	3	本間雅晴陸軍中将。
		「黒ダイヤ地帯に第二のメツカ建設／華北の回教勞工部隊入滿」	13129	19430601	2	
		「大東亜建設に協力する宗教活動／神仏基回教の関係者協議」	13140	19430613	2	
		「戦場の体験活し宗教報国／神仏基回の関係者を一丸に／総裁に永井氏、従軍宗教報国会発足」	13143	19430617	2	
		「聖戦完遂を祈禱／皇軍へ協力／スマトラ七百万回教徒の決議」	13152	19430627	3	
		「武漢三鎮の回教徒協力」	13152	19430627	3	
		「スマトラに初の回教徒大会」	13156	19430702	1	
		「共栄圏宗教講座／天理教亜細亜文化研が開く」	13176	19430725	3	天理教亜細亜文化研究所（現、天理大学おやさと研究所）の主催で7月27日から3日間、公開講座。大久保幸次「共栄圏の回教」ほか。
		「回教の公認問題／微妙な民族関係と睨合せ／政府慎重に対策考慮」	13188	19430808	2	
		「二百の回教徒／時局産業へ／奉天の転〇朗景」	13217	19430911	2	□は判読不能。

『中外日報』所収イスラーム関係記事目録（1937～45年）

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

		「ジャワの回教二団体正式認可」	13218	19430912	2	「ナフダトゥル・ウラマ」「モハマデイヤ」が、軍政当局より宗教団体として認可。
江口堅次		「ジャワ回教団体認可：1・2」	13242	19431012	1	
江口堅次		「ジャワ回教団体認可：3」	13243	19431013	1	
江口堅次		「ジャワ回教団体認可：4」	13244	19431014	1	
江口堅次		「ジャワ回教団体認可：5」	13245	19431015	1	
		「蒙疆回教徒婦女視察団」	13246	19431016	2	
江口堅次		「ジャワ回教団体認可：6」	13247	19431019	1	
		「日本人のためのイスラム教伝道所／大阪蜚ヶ池に初めて設立」	13252	19431024	3	
		「海外宗教事情／比島回教徒の協力」	13354	19440229	2	
		「インドネシア向／映画“日本回教徒”」	13335	19440302	2	朝日映画社の製作。大日本回教協会も関与。
		「勤労精神の鼓舞／回教徒も増産に日本と協力」	13366	19440314	2	
		「セラム回教徒／挺身隊を結成／皇軍に“翼”の献金」	13372	19440321	2	
		「昭南特別市に情報宣伝委員会／現地各民族、宗教家を網羅」	13376	19440326	2	
		「南方の朗話／六十の坂越した老人組も続々参加／サマル島全回教徒が「強制農耕令」に蹶起」	13376	19440326	3	
		「新東亜建設の一翼に／教育、厚生に重点／蒙古に回教徒指導要綱」	13377	19440328	2	蒙古連合自治政府の動向。
		「共栄圏域に回基教徒の協力」	13378	19440329	1	
		「回教民族の大同団結を強調」	13379	19440330	2	
		「モロ族回教徒の反響／在日教区長の声明に」	13404	19440502	1	アブデュルレシト・イブラヒムの声明。
		「東西呼応して回教徒に／司教、区長の大飛檄」	13406	19440504	1	インドの動向。
		「イスラム教の動向／天竺に暴英を討つ／世界的情景」	13407	19440505	1	
		「比島から留日学生団を派遣」	13407	19440505	2	留学生に回教徒含む。
		「動向を重視される／ベンガールの回教徒／分離政策の弊も解消」	13410	19440509	2	
千家尊建		「武蔵大宮参拝と回教記：上」	13412	19440511	1	
千家尊建		「武蔵大宮参拝と回教記：下」	13413	19440512	1	
千家尊建		「回教を如何に観る：上」	13414	19440513	1	
千家尊建		「回教を如何に観る：下」	13415	19440514	1	
		「回教徒の決戦構へ指導」	13415	19440514	2	ジャワ軍政監部の指導。
		「回教公認問題は／次回の方策委員会に提出」	13416	19440516	2	文部省の宗教教化方策委員会の動向。
		「礼拝堂を修築の皇軍の好意に感激／回教徒の協力積極化」	13416	19440516	2	ミンダナオ島の動向。
		「蒙疆回教徒の総合調査実施」	13438	19440610	2	文部省民族研究所の調査。
		「ガンジー翁の釈放と印度回教徒の動向」	13439	19440611	1	
塚原嘉平次		「アチエの回教問題／回教と政治の混淆事情：上」	13452	19440627	1	スマトラ島のアチエ人の動向。
塚原嘉平次		「アチエの回教問題／回教と政治の混淆事情：中」	13453	19440628	1	

二七一

塚原嘉平次		「アチエの回教問題／回教と政治の混濁事情：下」	13454	19440629	1	
		「蒙疆回教の実相／岩村民族研究所員談」	13481	19440804	2	
		「イブラヒム翁」	13503	19440903	2	訃報記事。
		「大ビルマ連盟に回教徒協力」	13504	19440905	2	
		「ロンボック回教師会議」	13504	19440905	2	小スンダ会の動向。
		「スマトラ原住民の喜び／回教最長老語る」	13515	19440920	2	小磯国昭内閣総理大臣の東印度諸島の独立認容声明を受けて、スマトラの「回教長老」の談話。
		「回教徒感激の勤労奉仕」	13515	19440920	2	セレベスの動向。
		「印回両教徒の和協問題／印度内部反響と英の観測：上」	13517	19440923	1	
		「印回両教徒の和協問題／印度内部反響と英の観測：中」	13518	19440926	1	
		「印回両教徒の和協問題／印度内部反響と英の観測：下」	13519	19440927	1	
		「回教徒青年挺身隊結成」	13581	19441223	2	インドネシア回教連合会。
		「マライに回教会議設立」	13581	19441223	2	
		「戦争協力への決意示す／マライ回教徒中央懇談会」	13581	19441223	2	
		「回基両教徒握手」	13584	19450114	2	回暦1364年正月、ジャカルタでの動向。

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

最初の東京回教禮拜堂 愈よ堂々たる偉容出現

世界各國の教徒代表參列
教祖誕生日に晴れの竣功式



右に、この堂の建築設計者、山崎嘉三郎氏の肖像が掲げられてゐる。

●「最初の東京回教禮拜堂」は、世界各國の教徒代表參列、教祖誕生日に晴れの竣功式、初めて出版される全邦訳のコーラン、在留回教徒の努力で、第11578号、1938（昭和13）年3月27日、3頁

瀬戸少年院の光榮

在留回教徒の努力で
初めて出版される
全邦訳のコーラン

【写真1】「最初の東京回教禮拜堂／愈よ堂々たる偉容出現／世界各國の教徒代表參列／教祖誕生日に晴れの竣功式」、「初めて出版される全邦訳のコーラン／在留回教徒の努力で」第11578号、1938（昭和13）年3月27日、3頁

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割



【写真2】『中外日報』紙面見本 須田正継「亜細亞と回教徒／シヨウ翁の回教觀その他：上」第11506号、1937（昭和12）年12月25日、1頁

トルコ・イスタンブルにおける合気道の伝播と現状

—その覚書—

石井隆 憲生
三沢伸 生

1. はじめに

いわゆる民族スポーツが他の地域にもちこまれ、それが定着するという話しは、これまで枚挙にいとまがないほど報告されてきた。わが国のスポーツの歴史に目を向けても、それは一目瞭然である。日本に外来スポーツが伝播してきた歴史に目を向けるなら、明治期に御雇外国人たちや海外と接触を持ってきた日本人たちが、日本国内において外来文化であったさまざまなスポーツ種目を紹介し、定着させてきた。

こうした状況とは正反対に、日本の伝統スポーツが諸外国に伝播し、それが当該社会の中で定着していく事例についても、実は非常に多く確認することができる。その代表的な例が柔道である。言うまでもなく柔道は1964年の東京大会以来、オリンピック種目として世界各国の中で行われるようになってきているが、この前史として柔道が世界各国に伝播していくという歴史が存在しているわけである。こうした伝播の過程を理解して行くためには、双方向からの視点が必要である。一つ目は、日本からどのように、それぞれの社会の中に柔道が入り込んでいったのかという語りと、もう一つは、入り込んできた社会の側に焦点を当てて、当該社会の側からの柔道を語っていくという視点が存在する。例えば、これまでの研究で言うなら、前者は村田直樹の『柔道の国際化』⁽¹⁾であり、後者は坂上康博編集の『海を渡った柔術と柔道』⁽²⁾がそれにあたる。しかし、現在のオリンピックに代表される国際柔道のあり方を見ると、日本国内で

は柔道は変容したと見られ、国際化したと受けとめられている。その一方で諸外国では、やはり本来は日本の伝統スポーツ、あるいは民族スポーツとして受けとめられている。こうした状況を考えると、実は、伝統スポーツの伝播は、それを伝えた方も伝えられた方も、両方の影響関係の下に形成されていくと考える方が、より理解を深めることにつながるものと思われる。

ところで、本プロジェクト研究は、もともと近代日本が影響を受けたタタル系トルコ人の民族のスポーツ活動を明らかにすることにある。そうした目的からするなら、日本国内の側でおこった活動内容に焦点を当てていくことになるのであるが、しかしながら、前述したように、スポーツに対しての影響関係を考えてみると、そこにはある意味での相互作用が認められることができると思われる。

そこで、今回の調査は上述のような観点から日本の伝統スポーツがいかにトルコに伝播し、それが後にトルコ風に変化をし、そのことが日本の伝統スポーツにも何らかの影響を与えてい



る可能性について、とりわけ合気道を事例として概観していくことが目的である。ただし、現時点では、まだ、その調査が緒についたばかりであることから、現地調査の際に入手できた文献資料と現地でのインタビューならびに活動の観察などで得られた情報を元に、その輪郭を示すことにしたい。

2. ファースト・コンタクト

民族スポーツの伝播は、これまでの研究が示しているように、それぞれの社会の状況によって異なっている。そうした意味では、トルコにおいて合気道が最初に持ち込まれていく過程についても同様である。トルコで合気道が最初に始められたのは、1982年のことであったと思われる。これよりも以前においては、現時点では史・資料なども確認することはできなかった。トルコに合気道が伝播する前後の状況について、現在わかる範囲では、米国コロラド州デンバー市に本部のある NIPPON-KAN の日本語版のサイトの中の本間学師範によって書かれた館長コラムが一つの手がかりとなる。このコラムのなかに「トルコ合気道、一冊の合気道指導書から」という文書が掲載されており、ここにトルコの合気道に関して非常に興味深い記述が見られる⁽³⁾。

「…合気道が日本から遠く離れた国の文化、しかも宗教も、習慣も異なる国に、染み込んでいくには長い時間と、随分多くの方々
の努力があったことでしょう。

情報の無い、或いは制約された中で、稽古をし、組織を作り上げ、合気道の普及に努めた人にお話を聞く時、私達はこういった先駆者達の苦勞に対して「どの様に報いなければ成らないのか」と考えるのです。今回、「小児白血病財団支援講習会」のため訪問した、トルコ イスタンブルを中心に指導されている、アリ・サン (Ali SAN) 先生は現在49歳。武道修行は1971年から、テコン道や空手、

キックボクシングなどを稽古し、軍隊在籍中は空手、空手の毎日でした。合気道との最初の出会いは1982年、友人3人と一緒に合気会本部に連絡を取ったそうです。目的は「合気道って何？」でした。何らかの資料が来ると期待しました。しかし何の返事も無く、さらに手紙を書いたそうです。「我々はトルコで合気道の稽古を始めたいが、書籍などの提供を受けられないかー」と。これも全く反応がなかったそうです。」

しかし熊谷研二氏によれば、この証言は事実と異なる。すでに1981年に熊谷氏（当時合気会5段）がエジプトにおいて合気道の稽古を始めていたことがトルコにおいても知られていた。そして1982年に熊谷氏がエジプトからトルコ、イスタンブルに転勤になることにより、アリ氏は友人であるレミ氏を介して熊谷氏に接触をほかり、指導書の刊行を求めた。熊谷氏および合気会はその求めに応じて、熊谷氏のもとに、レミ、アリー、ムスタファ、ヤルチュン、イーサン等が集い、バーコル氏が所有するスポーツ・クラブにおいて稽古が始まったとのことである。

アリー氏によるイスタンブルにおける合気道開始の顛末にかんする記述には事実齟齬が見られるものの、こうして1982年にイスタンブルに駐在を始めた熊谷氏によって創始された。

熊谷氏はトルコで出版した『合気道教本』には次のように証言する⁽⁴⁾。

「私は1982年にイスタンブルで約10名の仲間達と合気道の稽古を始める機会を得ました。それから約6年間稽古場所は転々としましたが、多くの人たちとこの国で合気道の稽古を楽しみました。1988年に日本に帰国するときには、この国の合気道人口も100人ほどに増えておりました。その後数年この国に来ることもなかったのですが、昔の仲間がまたこの国に来る機会を作ってくれ、それから年に1、2度指導に来るようになりました。

そしてこの10年の間に当国の合気道人口も1000人を超す程に成長し、昔の稽古仲間も立派な指導者として頑張っております。しかしながら、私の弟子から孫弟子、そして曾孫弟子となってくると、本来の合気道からやや離れたものを合気道と思い稽古している者を見かけるようになりました。そこでこの国に合気道を紹介した者の責任として、そのような人たちを少しでも正しい合気道の道へ戻すための合気道の指導書の必要性を痛感していたところ、自分自身も合気道を稽古し、この国に留学しトルコ語も堪能な町恵美さんから手助けをしてもよいとの申し入れがあり、この機会を逃してはいけなないと考え、この教本を発行することになりました。…(以下省略)…」

この教本が出版されたのが2007年であることからすると、熊谷氏がイスタンブルから離れて、20年近く経過して、合気道の中身（おそらく技術的な内容）が変化をしてきたことがわかり、それを修正するためにこの教本の出版が意図されたということも読み取ることが可能である。

しかし、いずれにしても、トルコにおいて合気道の萌芽が見られたのは1982年のことであり、その伝播は、日本人の合気道指導者である熊谷研二氏によるものであった。

3. 合気道の組織

1982年にイスタンブルにおいて合気道が行われるようになるのだが、その初期の段階ではどのような形で活動が繰り返られていたのだろうか。この点について、イスタンブルでの合気道指導を行ってきた熊谷氏が勤めてきた小松製作所のOBたちで作っているコマツ社友会のホームページの中には、氏が寄稿した文章が掲載されている。この文章の中には、トルコでの合気道指導についても触れられている。トルコの合気道に関する記述は次の通りである⁽⁵⁾。

「次の勤務地トルコでは、1982年に行つてすぐ、民間のスポーツクラブで柔道経験者に教えることから始めました。一度エジプトで全く合気道を知らない人達に教えることを経験していましたし、トルコ人は、基本的に親日国であり、格闘技好きなのでスムーズに合気道を始めてくれました。なんとといってもトルコには6年半もいたので、じっくり教える事も出来たし、自分の稽古も楽しめました。帰国する時約100人程だった合気道人口もいまは3,000人ほどいるのではないのでしょうか。3年前トルコで合気道教本と言う本を出したのですが、値段が日本円で3,000円程なのでトルコの経済レベルから考えると誰でも買えると言うものではないのですが、1,300冊売れました。…(以下省略)…」

これを読むと合気道が指導された最初は、柔道経験者を対象にして合気道が教えられており、合気道を学びたい人々を集めて指導したのではなかったことがわかる。また、このことと関連していると思われるのであるが、合気道がトルコ国内で次第に認知されていくことで、合気道がトルコ政府認可の団体として位置づけられるようになったようである。『合気道教本』には、次のような記述が見られる⁽⁶⁾。

「私が合気道を紹介してから今年で25年目を迎えるトルコでは、現在、最初に3段をとった弟子たちは5段を取得しています。彼ら6人が中心となり、国内ではイスタンブルのみならず、首都のアンカラ、保養地のイズミルなど20数箇所まで稽古が続けられています。トルコ政府認可の組織、トルコ柔道合気道協会も設立され、合気道人口も二千人を超え、ここで稽古をした者がレバノン、アゼルバイジャン、カザキスタンで指導するほどまでに成長しております。ボリューム的にはこのように成長していますが、武道とは何なのか、なぜ合気道には試合がないのか、などの

質的成長にはまだまだ弛みない修行が求められるのではないのでしょうか。」

この記述によれば、トルコ国内での組織は確実に拡大しており、合気道人口も2,000人を超えるまでになったようである。おそらくこうした競技人口の拡大ということもあり、合気道はトルコ政府の認可の組織となったのだと考えられる。しかし、その認定はおもしろいことに柔道と合併する形で「トルコ柔道合気道協会」として設立させている。合気道の指導が当初、柔道経験者を対象としていたことが理由なのか、それとも日本の武道ということで柔道と同じ組織になったのかは不明であるが、いずれにしてもその活動が認められたことは確かである。

しかし、こうした組織の位置づけが2008年以降に変化することになる。合気道は中国の伝統武術である「武術（ウーシュー）協会」と合併することになる。この理由は定かではないが、予測されることは、柔道は既に国際スポーツであり、オリンピック種目でもあることから、対外的に独立した一団体としての位置づけを確保しなければならない必要性が生まれた可能性がある。また、東洋の武術という括りと、競技人口からしてもそれほど多くない団体と組み合わせられた可能性は高い。

ところで、このように合気道の組織がトルコ政府の認可を受けることで、合気道の段位認定についても大きな変化が生まれることになった。もともと段位の認定は、熊谷氏が昇段試験をおこなうことで、合格した者には合気会から段位認定証が渡されていた。こうした段位認定のシステムは、日本では当たり前の方法であり、ここに政府機関が関わることはない。しかし、トルコでは合気会の段位認定は、あくまでも一組織の認定基準によるものであることから、国家レベルでの認定が必要だという判断がされるようになった。つまり、先の組織がトルコの国家認定の段位を発行する機関となったのである。そのためにはこの協会が独自に段位認

定制度を設け、そこで昇段審査をするということがおこなわれるようになった。この国家段位を取得することが指導者に義務付けられ、合気道の指導を可能とするようなシステムへと変化しつつある。現在はまだこの移行期にあるようで、合気会の段位と協会の段位の両方を持つことで、指導が可能となっているようであるが、実際には、合気会の段位のみで指導している状況もみられる。ただ、この国家認定の段位システムには、現状において、大きな問題もあるようで、最大の問題点の一つが段位を認定する審査員が必ずしも合気道の高段者、もしくは合気道に通じた人ではないということである。もちろん審査員の中には、長年合気道を修練した人たちも含まれている。しかし、組織的な問題で、まだ、それほど合気道に精通していない人も審査員に含まれること、さらにはそうした人間たちの発言力が強いことがあるという。こうした諸問題から、国家認定の段位システムに賛同しない人々もいるということのようである。

国が一定の技術に対して認定するという制度は、取り立てて珍しいものではない。ただ、武道という文脈においては、日本では近代国家成立以前から武道（武術）が存在していたので、すでにその認定は従前の組織が行ってきた。しかし、国民国家成立後にこうした技術認定を必要とするものが、国家と連動するとそれは国家認定資格として一定の意味を持つことになる。特に、スポーツの場合には、それがビジネスとして作用することがあるのであれば、その最終的な決定権を国家がになうこともそれほど珍しいことではないと考えられる。

4. 現在の合気道の活動

1982年に10名から始まったイスタンブルの合気道は、1988年に熊谷氏が帰国するときには、その10倍の100名に達していた。また、3段取得者も7名になっていた。現時点において詳細は明かではないが、その後は3段取得者たちが、それぞれに弟子たちを集めて指導をしたよ

うである。

現在は熊谷氏によって蒔かれた合気道もいくつかの組織に分かれているようである。熊谷氏の指導によって始まった合気会の系列では、3段取得をしていた弟子たちが現在では、5段、6段と昇段を続けており、この30年ほどの間に高段者が増えていった。また、いわゆる合気会以外にも、合気道が入り込んだようである。

それでは、現在のイスタンブルにおける合気道の活動について、その具体的な概要について紹介することにしよう。

我々は2012年9月5日、イスタンブルのヨーロッパ側北部の高級住宅街であるエティレル(Etiler)地区の「進歩寄進学校(Terakki Vakif Okulları)」という中学・高校一貫校に会場を借りて行われている、一般会員の合気道クラスの稽古を観察した。



【地図：イスタンブル市】

稽古は日本でおこなわれているものと、それほど大きな違いはないように見えるが、それでも一部違いを確認することができた。観察することができた稽古は、有段者たちの10数名によるものであった。会員の多くは、開始時間までに集合していたが、中には仕事の関係なのか、遅れて参加する者もいた。夕方、19時過ぎから稽古が始まった。入念に準備体操をしたあと、一礼をして基本動作をおこなう。先生が弟子の一人を呼び出し、そこで基本動作となる動きを何度か見せる。この模範演技が終わると、弟子

たちは一礼をしてから基本動作の動きに入る。この間、ほとんど言葉らしいものはなく、摺足の音だけが室内に響く。基本動作を何度か行くと、次にこの動作を使って、弟子たちは実際に投げ技を行っていく。一通り、こうした基本技が終わると、次にやはり一人の弟子を前に呼んで、先生が技をかけ始める。今回はいくつかのパターンを見せるのであるが、特に説明をするわけではなく、そのパターンを実演することで理解させていくという方法をとっている。ときには、ゆっくりと動きながら体さばきと極めを見せながら技を指導する。こうして一通り技を見せたところで、先生と弟子は正座し一礼をするが、この時に弟子たちは、「はい、先生」という日本語を口にしたあとで技の練習をはじめるのである。先生は弟子たちの間を廻りながら、うまく技の出せない弟子に対して、手本を見せるといったことを行っていく。そして一通り練習が終わったところで次の技の練習に入るのである。

有段者を対象としているので、このような稽古方法が取られているようである。この学校の一室にある道場は常設されているものであり、ここでは中等部、高等部、一般の練習がおこなわれている。また、この部屋の隣にも、児童専用の道場が設置されているという。

このクラブの活動を見ると、稽古は日曜日が休みで、それ以外には合気道の指導がおこなわれているという。学校教育と関係する指導は、金曜日が中学部門と高校部門を対象にしておこなわれている。土曜日の午前中は有段者だけのクラスとなっており、10人前後が参加している。火曜と木曜は児童のためのクラス、月曜日と水曜日は一般の部の稽古となっている。

学校教育では25人から30人が一つのクラスであり、児童のクラスは15人から20人で構成されているという。道場は学校の教室内に常設されている。会員の入会については、学校という場で活動が行われていることもあり、この学校に通う生徒たちを通して、親たちが情報を得た

り、また、このクラブがウェブサイトを持っているので、それを通して会員の募集が行われているようである。各クラスの活動時間については、児童クラスは5時半から6時半の1時間、青年クラスは2時間が活動時間となっている。

今回、観察させていただいた際に稽古を指導していたアイハン・カヤ (Ayhan KAYA) 先生は合気会において4段の段位を有しており、非常に素晴らしい技術を持つ先生であった。ちなみに、この先生が全てのクラスを指導しているわけではなく、他にも何人か先生がいるというのであった。

ところで、ここに見たような活動は、あくまでも一例であるが、これと類似する活動はトルコ国内で確認すること可能だという。また、現在は以前よりも下火になってきたというが、トルコでは合気道が一つのビジネスとして成立してきたという。そのため、少し技が身につくと、すぐに独立してクラスを開講し、月謝を取って弟子に教えるということが非常に多く行われていたようである。こうした状況は技の低下をもたらすこととなった。しかし、近年では指導者の数も増え、実際に合気道を学びたい人たちは、ネット情報や先生の評判などを聞いて、クラスを選ぶようになってきたようである。そのため実力のない先生たちのクラスは、消滅していく傾向にあるという。

5. おわりに

今回はイスタンブルを中心に定着した合気道の全体について概観した。トルコにおける合気道は、1982年にはじめておこなわれるようになってから30年が経過した。すでに、その活動に様々な変化が見られていることも事実である。こうした活動の経過を詳細に調べていくことは、この数年の内に行わなければならないと思われる。この時期に活動していた人々は現在でも現役の指導者として活躍している。しかし、トルコの合気道の詳細を知ろうとするなら、それほど猶予が残されているわけではな

い。なるべく早くに、史資料の収集と関係者からのインタビューが必要だと思われる。

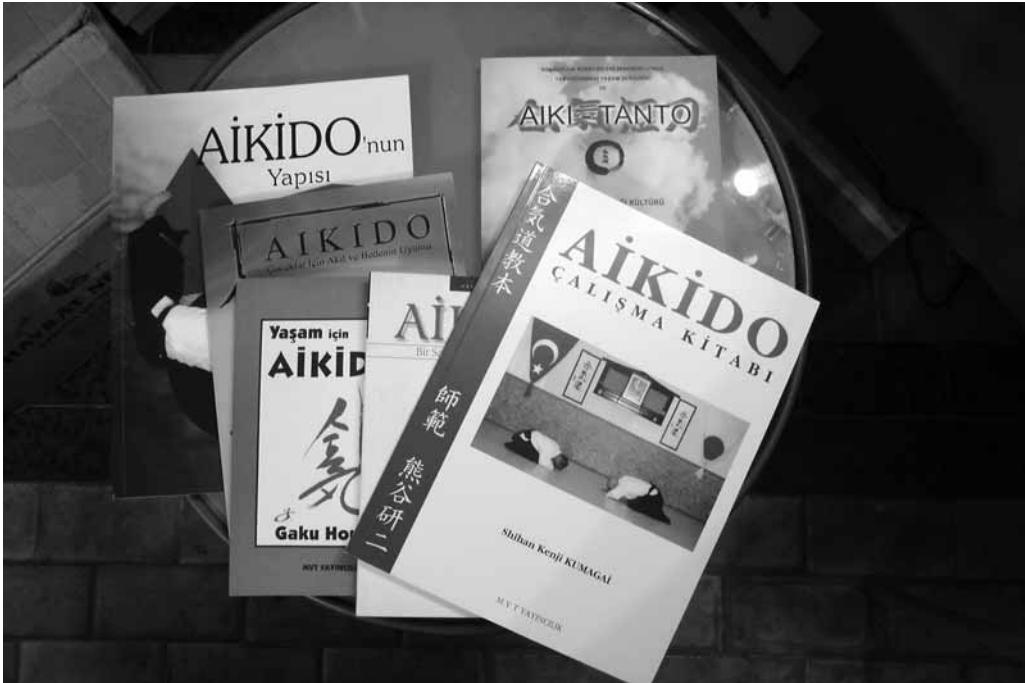
また、最初に述べたように、スポーツを伝える側と伝えられた側の相互作用を見ると、現段階では、合気道を伝えられたトルコの側に大きな変化が見られるようで、この変容についても詳細に調べていくことが、お互いの影響関係を考えていくための重要な基礎資料になると考えられる。

※末筆になりましたが、今回のイスタンブルにおける調査にあたり、インタビューに応じていただきました、町恵美・ヴェジヒー・テルジー (M.Vezihî TERZİ) 御夫妻、アイハン・カヤ (Ayhan KAYA) 先生と生徒さんたち、また草稿を校閲いただきました熊谷研二氏に感謝申し上げます。

※本稿は、東洋大学学術推進センター・研究所プロジェクト研究助成金に基づく、研究課題「近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割」【拠点：東洋大学アジア文化研究所、研究代表者：石井隆憲、平成23～25年度】の研究成果の一部である。

<註>

- (1) 村田直樹『柔道の国際化－その歴史と課題－』日本武道館、2011年。
- (2) 坂上康博 (編)『海を渡った柔術と柔道－日本武道のダイナミズム－』青弓社、2010年。
- (3) 下記の URL のウェブサイトを参照のこと。
<http://www.aikido-nipponkan-japan.com/06-13.html> (2012年10月1日最終アクセス)
- (4) Kenji KUMAGAI, *Aikido Çalışma Kitabı* (=熊谷研二『合気道教本』), İstanbul : MVT Yayıncılık, 2007, p.8.
- (5) 下記の URL のウェブサイトを参照のこと。
http://www.komatsu.co.jp/syk/kako_kajijil10503.htm
- (6) KUMAGAI, op.cit., pp.32-33.



【写真1：トルコ共和国で刊行される合気道教本（トルコ語）】

【写真2：イスタンブル合気会 HP（左）と合気道コースの説明チラシ（右）】



【写真3：進歩寄進学校での練習風景①】
(練習開始前の総員礼)



【写真4：進歩寄進学校での練習風景②】
木刀を使った組手指導（奥がアイハン・カヤ先生）

アから日本（日本の植民地であった満洲・朝鮮半島・台湾を奮む）へ亡命し、日本を終の棲家としていた在日タール系トルコ人たちが、大きな役割を果たしていたからである。戦後という状況において、欧米系スポーツ選手招聴が困難にあるなかで、彼らがときにアメリカ人、ときにソ連人と出自を偽りながら、日本の格闘技系民族スポーツの生成・発展に貢献してきたのである。

本研究は国内外において長らく看過されてきた研究課題であるスポーツ人類学の視点から近代日本の民族スポーツの生成に関する研究を目指すものである。しかしながら国際的学界におけるスポーツ人類学の進展にともない、民族スポーツの多面性・生成過程にかんする諸要素の分析の必要性が指摘されている。国内でも日本の民族スポーツ、すなわち相撲や柔道のような国技と呼ばれる伝統的スポーツから、野球・サッカーのような大衆の圧倒的人気を誇る外来スポーツに至るまで、民族的諸要因が研究されている。本研究はそのなかでアジア諸民族の役割に焦点をあてながら研究する位置づけにある。研究代表者・研究分担者は既に既存の研究プロジェクトで、日本を含めてアジア諸国広域において現地調査を行い、現地研究者との交流を図っている。その意味で本研究は民族スポーツ生成の国際比較とも位置づけられる。

研究分担者・研究協力者は、研究代表者のようにスポーツ人類学を専攻しないものの現地研究に長らく従事しており、戦後日本における在日タール系トルコ人の活躍は日本日トルコ関係史、さらには日本イスラーム世界関係史において、新しい事実を解明する研究として位置づけることができる。

《研究経過》

三年間にわたる研究プロジェクトの中間年度にあたる本年度は初年度の成果を踏まえて、初年度に収集した史資料の分析と電子化を進めてデータベース化を推進し、さらに新規の史資料の探索を進めた。一方、聞き取り調査としては研究代表者の石井が夏季休暇期間中を利用してトルコに短期調査に赴き、格闘技関係の聞き取り調査を行った。三沢は東京において代々木モスクを基盤に在日タール人関係者との聞き取り調査の準備を進め、おなじく福田は神戸モスクを基盤に関西の在日タール人関係者への聞き取り調査準備を進めた。

具体的には、文献関係の史資料に関して、初年度に発掘・入手した近代日本のスポーツ・メディア史上において重要な位置を占める「アサヒスポーツ」（一九二三年創刊）、「週刊スポーツ毎日」（一九四八年創刊）の分析・電子化を進めてデータベースの準備を進めた。また初年度に引き続き、戦前・戦中期に在日タール人と接触した駒澤大学教授の大久保幸次に関する諸史資料調査、さらに研究協力者の大澤広嗣の協力を仰いで仏教系日刊新聞である『中外日報』の調査を行った。

トルコと国内における在日タール人関係者への接触は、戦後六五年以上を経過した現在、プロジェクト開始前に想定して以上に困難に直面しているのが現状である。そのため石井のトルコにおける調査では格闘技との接点から日本の伝統的格闘技である合気道がどのように流入したのかという逆方向での関係をまず調査することになり、国内においては東京・関西とも関係者への聞き取り調査がわずかながら前進したに過ぎず、次年度の最終年度に向けて調査・研究の方向を再検討している。

【報告】 研究所プロジェクト

近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割

《研究期間》 平成二三（二）五年

《研究代表者》 石井 隆憲（ライフデザイン学部教授／アジア文化研究所

研究員）

《研究分担者》 三沢 伸生（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

福田 義昭（大阪大学文学部非常勤講師／アジア文化研究

所客員研究員）

《研究協力者》 大澤 広嗣（文化庁文化庁宗務課専門職／元アジア文化研

所客員研究員）

吉田 達矢（名古屋学院大学経済学部専任講師／アジア文

化研究所研究員）

《研究協力者一トルコ共和国》

メルトハン・デユンダル（Merhan DÜNDAR）

（アンカラ大学言語歴史地理学部准教授）

ギョクニユル・アクチャター（Gökür AKÇADAĞ）

（エルドゥズ工科大学人間科学部准教授）

※そのほか、資料探索、聞き取り調査、現地調査において様々な方から、貴重なコメントや御意見を頂戴しております。紙片の關係上ここにお名前を列記できませんが、この場をお借りて御礼申し上げます。

《研究目的》

現在の日本において、野球・サッカー（蹴球）に代表されるように、ヨーロッパ起源のスポーツばかりに注目が集まるあまりに、アジア諸民族の果たしてきた役割に関して等閑視されてしまっている。しかしながら今日の大相撲におけるモンゴル出身をはじめとする外国人力士の活躍に見られるように、近代日本の民族スポーツ生成において、東アジアから西アジア（イスラーム世界）にいたるまでに展開する広範囲なアジア地域の諸民族の影響は極めて大きいものである。

本研究は、このように単に社会において忘却されるのみに留まらず、学術的研究の組上に取り上げられることが稀有な状況にある、近代日本の民族スポーツ生成においてアジア諸民族の果たしてきた役割について、学術的に研究する上において不可欠となる基礎的資料の発掘・データベース構築を行いながら、解明することを大きな目的としている。より具体的に、本研究では、アジア諸民族のうち、タタール人をはじめとする西アジア民族の役割について解明することを目的として特化し、さらに資料発掘・分析を進める上において単に日本国内だけの状況分析に限定することなく、アジアを舞台にしてスポーツがどのように伝播し、影響関係を構築していったかという近代スポーツ文化の全体像を視野に入れながら、研究を進めていくことを目的としている。

西アジア民族に研究目的を特化するのには、戦後直後の一九四〇年代後半から五〇年代にかけて、日本においてプロレスに代表されるように格闘技系のスポーツが再編され変容しながら、今日にまで至る民族スポーツとしての地位の基礎を築いていた。この過程において、実は戦前においてロシ

平成二十四年度

研究所プロジェクト報告

「近代日本の民族スポーツ形成におけるアジア諸民族の役割」